

日蓮大聖人御書全集

がつすいごしよ

月水御書

新版
1642
）
1648

がつすいごしよ

月水御書

ぶんえいがんねん

がつ にち

さい

だいがくさぶろう

つま

文永元年('64) 4月17日

43歳

大学三郎の妻

つた

うけたまわ

ごしようそく

じょう

い

ほけきよう

ひ

伝え承る御消息の状に云わく「法華経を日ごとに

いっぽん

にじゅうはっぽん

あいだ

いちぶ

読

そうら

一品ずつ、二十八日が間に一部をよみまいらせ候いしが、

とうじ

やくおうほん

いっぽん

まいにち

しよさ

そうろう

当時は薬王品の一品を毎日の所作にし候。ただ、もとの

いっぽん

そうろう

うんぬん

ように一品ずつをよみまいらせ候べきやらん」と云々。

ほけきよう

いちにち

しよさ

いちぶはっかんにじゅうはっぽん

いっかん

法華経は一日の所作に一部八卷二十八品、あるいは一巻、

いっぽん

いちげ

いっく

いちじ

だいまく

あるいは一品・一偈・一句・一字、あるいは題目ばかりを

なんみようほうれんげきよう

いっぺん

唱

いちご

あいだ

南無妙法蓮華経とただ一遍となえ、あるいはまた一期の間

いちど

いちご

あいだ

いっぺんとな

にただ一度となえ、あるいはまた一期の間にただ一遍唱う

き

ずいき

ずいき

こえ

き

ずいき

るを聞いて随喜し、あるいはまた随喜する声を聞いて随喜

てい ごじつてんでん

すえ

こころざし

薄

し、これ体に五十展転して、末になりなば、志 もうすく

ずいき

こころ

よわ

に

さんさい

ようち

もの

果

無

なり随喜の心の弱きこと、一・二・三歳の幼稚の者のはかなき

ぎゆうば

ぜんご

わきま

がごとく、牛馬なんどの前後を弁えざるがごとくなりとも、

たきよう

がく

ひと

りこん

ちえ

賢

しやりほつ

他経を学する人の、利根にして智慧かしく、舍利弗・

もくれん

もんじゆ

みろく

ひと

しよきよう

むね

うち

浮

目連・文殊・弥勒のごとくなる人の、諸経を胸の内にか

おわ

ひとびと

おんくどく

すぐ

べて御坐しまさん人々の御功德よりも勝れたること、

ひやくせんまんおくばい

由

きようもん

てんだい

みようらく

百千万億倍なるべきよし、経文ならびに天台・妙楽の

ろくじっかん　うち　み　はべ
六十巻の中に見え侍り。

きようもん

ほとけ

ちえ

たしよう

ちゆうりよう

されば、経文には「仏の智慧をもつて多少を籌量す

ほとり

え

と

ほとけ

おんちえ

とも、その辺を得じ」と説かれて、仏の御智慧すら、こ

ひと

くどく

知

ほとけ

おんちえ

有

難

の人の功德をばしろしめさず。仏の御智慧のありがたさは、

さんぜんだいせんせかい

しちにち

にしちにち

降

あめ

かず

この三千大千世界に七日、もしくは二七日などふる雨の数

知

おわ

そうろう

ほけきよう

をだにもしろしめして御坐しまし候なるが、ただ法華経

いちじ

とな

ひと

くどく

し

み

の一字を唱えたる人の功德をのみ知ろしめさずと見えたり。

われ

ぎやくぎい

ほんぶ

くどく

知

そうら

いかにいわんや、我ら逆罪の凡夫の、この功德をしり候い

なんや。

しかりといえども、如来の滅後二千二百余年に及んで、

ごじよく 盛

としひさ

じ 触

ぜん

じ有

難

五濁さかりになりて年久し。事にふれて、善なる事ありがた

ぜん

な

ひと

いち

ぜん

じゆう

あく

つく

かさ

し。たとい善を作す人も、一の善に十の悪を造り重ねて、

けつく

しょうぜん

付

だいあく

つく

こころ

だいぜん

しゆ

結句は小善につけて大悪を造り、心には大善を修したり

まんしん

お

よ

によらい

よ

い

という慢心を起こす世となれり。しかるに、如来の世に出で

たま

そうら

くに

にじゆうまんり

さんかい

隔

させ給いて候いし国よりしては二十万里の山海をへだて

ひがし

寄

にちいきへんど

こじま

生

ごしよう

くもあつ

て東によれる日域辺土の小島にうまれ、五障の雲厚うして

さんじゆう

絆

繫

たま

によにん

おんみ

三従のきずなにつながれ給える女人なんどの御身として、

ほけきよう

ごしんようそうろう

有

難

もう

かぎ

法華経を御信用候は、ありがたしななんととも申すに限り

そろうろ

いちだいしようぎよう

ひら

み

けんみつにどう

きわ

たま

なく候。およそ一代聖教を披き見て、ちかごろ 顕密二道を究め給

ちしや

かくしよう

ちかごろ

ほけきよう

す

えるようなる智者・学匠だにも、ごしゆくぜん 近来は法華経を捨てて

ねんぶつ

もう

そろうろ

ごしゆくぜん

ほけきよう

念仏を申し候に、いかなる御宿善ありてか、この法華経

いちげいつく

おんみ

う

たま

を一偈一句もあそばす御身と生まれさせ給いけん。

ごしようそく

はい

そうら

うどんげ

み

まなこ

されば、この御消息を拝し候えば、うどんげ 優曇華を見たる眼よ

珍

いちげん

かめ

う

ぎ

あな

あ

すく

りもめずらしく、ごころ 一眼の亀の浮き木の穴に値えるよりも乏

ごころ

あ

難

おんこと

おも

なきことかなと、あ 心ばかりは有りがたき御事に思いまいら

そろうろ

いちごんいつてん

ずいき

ことば

くわ

ぜんこん

よけい

せ候あいだ、一言一点も随喜の言を加えて善根の余慶に

励

そうら

おそ

くも

つき

隠

ちり

もやとはげみ候えども、おそ ただ恐らくは雲の月をかくし塵の

かがみ 曇

みじか つたな ことば しゆしやう

鏡をくもらすがごとく、短く拙き言にて殊勝にめでた

おんくどく もう かく 曇 そろろう

痛

き御功德を申し隠しくもらすことにや候らんと、いたみ

おも そろろう きめい 黙

思い候ばかりなり。しかりといえども、貴命もだすべき

いってき こうかい くわ しゃつか にちがつ 添 みず 増

にあらず。一滴を江海に加え、燭火を日月にそえて、水をま

ひかり そ おぼ

し、光を添うると思しめすべし。

ほけきやう もう はちかん いっかん いっぼん いちげ いっく

まず、法華経と申すは、八卷・一卷・一品・一偈・一句、

ないし だいもく とな くだく おぼ

乃至、題目を唱うるも、功德は同じことと思しめすべし。譬

たいかい みず いてき むりやう こうが みず おさ

えば、大海の水は一滴なれども、無量の江河の水を納めた

によいほうしゆ いっしゆ まんぼう 降 ひやくせんまんおく

り。如意宝珠は一珠なれども、万宝をふらす。百千万億の

てきしゆ

おな

ほけきよう

いちじ

ひと

てきしゆ

滴珠もまたこれ同じ。法華経は一字も一つの滴珠のごとし。

ないしまんおく

じ

まんおく

てきしゆ

しよきよう

しよぶつ

乃至万億の字も、また万億の滴珠のごとし。諸経・諸仏の

いちじ

いちみようごう

こうが

いつてき

みず

さんかい

いつせき

一字・一名号は、江河の一滴の水、山海の一石のごとし。

いつてき

むりよう

みず

そな

いつせき

むすう

いし

とく

具持

一滴に無量の水を備えず、一石に無数の石の徳をそなえも

たず

もししからば

ほけきよう

ほん

おわ

この法華経はいずれの品にても御坐し

ませ

ただ御信用の御坐

しまさん品

こそめ

ずらしくは候え

珍

総じて、如来の聖教はいずれも妄語の御坐しますとは

うけたまわ

にようらい

しようぎよう

もうご

おわ

承り候わねども、再び仏教を勘えたるに、如来の

きんげん

なか

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

もう

金言の中にも大小・権実・顕密など申すこと、経文よ

きんげん

なか

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

もう

きようもん

承り候わねども、再び仏教を勘えたるに、如来の

ことお

そうろう

ろんじ

にんし

しやくぎ

り事起こつて候。したがつて、論師・人師の釈義に

粗々み

せん

もう

しやくそん

ごじゆうよねん

あらあら見えたり。詮を取つて申さば、釈尊の五十余年の

しよきよう

なか

さきしじゆうよねん

せつきよう

疑

そうろう

諸教の中に、先四十余年の説教はなおうたがわしく候

ほとけみずか

むりようぎきよう

しじゆうよねん

しんじつ

ぞかし。仏自ら無量義経に「四十余年にはいまだ真実を

あらわ

もう

きようもん

目

当

と

たま

ゆえ

顕さず」と申す経文、まのあたり説かせ給える故なり。

ほけきよう

ほとけみずか

いっく

もんじ

ししようじき

ほうべん

法華経においては、仏自ら、一句の文字を「正直に方便

す

むじようどう

と

さだ

たま

を捨てて、ただ無上道を説くのみ」と定めさせ給いぬ。そ

うえ

たほうぶつ

だいち

わ

い

たま

みようほけきよう

の上、多宝仏、大地より涌き出でさせ給いて「妙法華経は、

みな

しんじつ

ししようみよう

くわ

じつぼう

しよぶつ

みなほけきよう

皆これ真実なり」と証明を加え、十方の諸仏、皆法華経の

座したにあつまりて、舌いを出だして、法華經ほけきようの文字もんじは一字いちじなり

もうご

由

じよせい

添 たま

たと

だいおう

とも妄語まうごなるまじきよし、助成じよせいをそえ給たまえり。譬たとえば、大王だいおう

きささき

ちようじやとう

いちみどうしん

やくそく

と后きささきと長者等ちようじやとうの一味同心いちみどうしんに約束やくそくをなせるがごとし。

ほけきよう

いちじ

とな

なんによとう

じゆうあく

ごぎやく

しじゆう

もし、法華經ほけきようの一字いちじをも唱となえん男女等なんによとう、十悪じゆうあく・五逆ごぎやく・四重しじゆう

とう むりよう

じゆうごう

ひ

あくどう

墮

にちがつ

等の無量むりようの重業じゆうごうに引ひかれて悪道あくどうにおつるならば、日月にちがつは

ひがし

い

たま

だいち

はんぷく

東ひがしより出いでさせ給たまわぬことはありとも、大地だいちは反覆はんぷくするこ

たいかい

しお

満

干

とはありとも、大海たいかいの潮しおはみちひぬことはありとも、破われ

いし あ

こうが

みず

たいかい

い

ほけきよう

たる石いしは合あうとも、江河こうがの水みずは大海たいかいに入いらずとも、法華經ほけきようを

しん

によにん

せけん

つみ

ひ

あくどう

お

信しんじたる女人によにんの世間せけんの罪つみに引ひかれて悪道あくどうに墮おつることはあ

ほけきよう しん によにん もの 妬 ゆえ

るべからず。もし、法華経を信じたる女人、物をねたむ故、

はら 悪 故 どんよく ふか 故 ひ あくどう

腹のあしきゆえ、貪欲の深きゆえなどに引かれて悪道に

お しゃかによらい たほうぶつ じつぽう しょぶつ ぶりようこうごう

墮つるならば、釈迦如来・多宝仏・十方の諸仏、無量曠劫よ

たも きた たま ふもうごかい やぶ

りこのかた持ち来り給える不妄語戒たちまちに破れて、

じようだつ こおうざい すぐ くぎやり だいもうご こ

調達が虚誑罪にも勝れ、瞿伽利が大妄語にも超えたらん。

然 ほけきよう たも ひと たの あ

いかでか、しかるべきや。法華経を持つ人、憑もしく有り

難

がたし。

いつしやう あいだ いちあく おか ごかい はつかい じつかい

ただし、一生が間、一悪をも犯さず、五戒・八戒・十戒・

じゆうぜんかい にひやくごじっかい ごひやくかい むりよう かい たも いっさいきよう

十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち、一切経を

空 う

いつさい

もろもろ

ぶつぼさつ

くよう

むりよう

ぜんこん

そらに浮かべ、一切の諸の仏菩薩を供養し、無量の善根を

積 たも

ほけきよう

ごしんよう

ごしんよう

つませ給うとも、法華経ばかりを御信用なく、また御信用は

しよきよう

しよぶつ

なら

おほ

なら

おほ

ありとも、諸経・諸仏にも並べて思しめし、また並べて思

ほか ぜんこん

ひま

ぎよう

ときどきほけきよう

ぎよう

しめさずとも他の善根をば隙なく行じて時々法華経を行

ほけきよう

もち

ほうぼう

ねんぶつしや

かた

じ、法華経を用いざる謗法の念仏者なんどにも語らいをな

ほけきよう

まつだい

き

かな

もう

もの

とが

おほ

し、法華経を「末代の機に叶わず」と申す者を科とも思し

いちご あいだぎよう

たも

むりよう

ぜんこん

めさずば、一期の間行じさせ給うところの無量の善根も

失

ほけきよう

おんくどく

かく

たちまちにうせ、ならびに法華経の御功德もしばらく隠れ

たま

あ びだいじよう

お

たま

あめ

そら

止

させ給いて、阿鼻大城に墮ちさせ給わんこと、雨の空にと

どまらざるがごとく、みね いし たに 転峰の石の谷へころぶがごとしと思しおぼ
めすべし。

じゆうあくぐぎやく

つく

もの

ほけきよう

そむ

十悪五逆を造れる者なれども、法華経に背くことなけれ

おつじよう

じようぶつ

うたが

はべ

いっさいきよう

持

ば、往生・成仏は疑いなきことに侍り。一切経をたもち

もろもろ

ぶつぼさつ

しん

じかい

ひと

ほけきよう

もち

諸の仏菩薩を信じたる持戒の人なれども、法華経を用い

あくどう

お

うたが

み

ることなければ、悪道に墮つること疑いなしと見えたり。

よ ぐけん

ちかごろ

せけん

み

おお

ざいけ

しゅつけ

予が愚見をもつて近来の世間を見るに、多くは在家・出家、

ひぼう

もの

誹謗の者のみあり。

ごふしん

ほけきよう

ほん

さき

もう

ただし御不審のこと、法華経はいずれの品も先に申しつ

おろ

こと

にじゅうはつぽん

なか

すぐ

るように愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめで

ほうべんぽん

じゆりようほん

はべ

よほん

みなしよう

そうろう

たきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候な

つね

ごしよさ

ほうべんぽん

ちようぎよう

じゆりようほん

り。されば、常の御所作には、方便品の長行と寿量品の

ちようぎよう

なら

よ

たま

そうら

べつ

か

い

長行とを習い読ませ給い候え。また別に書き出だしても

そうろう

そうろう

よ

にじゅうろつぽん

み

かげ

したが

あそばし候べく候。余の二十六品は、身に影の随い、

たま

たから

そな

じゆりようほん

ほうべんぽん

読

そうら

玉に財の備わるがごとし。寿量品・方便品をよみ候えば、

じねん

よほん

そうら

そな

そうろう

やくおうほん

自然に余品はよみ候わねども備わり候なり。薬王品・

だいばほん

によにん

じようぶつ

おうじよう

と

そうろうほん

そうら

提婆品は女人の成仏・往生を説かれて候品にては候え

だいばほん

ほうべんぽん

しよう

やくおうほん

ほうべんぽん

じゆりようほん

ども、提婆品は方便品の枝葉、薬王品は方便品と寿量品の

しょう せうろう つね ほうべんぼん じゆりようほん にほん

枝葉にて候。されば、常にはこの方便品・寿量品の二品

せうちら よ ほん じじ おん 暇 隙

をあそばし候いて、余の品をば時々、御いとまのひまにあ

せうろう

そばすべく候。

ごしょうそく じよう い ひ さんど なな もんじ

また御消息の状に云わく「日ごとに三度ずつ七つの文字

はい せうろう な む いちじようみようてん いちまんべんもう

を拝しまいらせ候ことと南無一乗妙典と一万遍申し

せうろう ひ せうろう れい な せうろう

候こととをば日ごとにし候が、例のことに成つて候

おんきよう 読 せうちら はい せうろう

ほどは、御経をばよみまいらせ候わず、拝しまいらせ候

いちじようみようてん もう せうろう 諳 せうろう くる

ことも、一乗妙典と申し候ことも、そらにし候は苦し

せうろう れい じ ひかず かな

かるまじくや候らん。それも例の事の日数のほどは叶う

そうろう

幾ひ

読

そうら

まじくや候らん。いく日ばかりにてよみまいらせ候わん

とうらんぬん

ずる」等云々。

だん

いつさい

によにん

ごふしん

つね

と

たま

この段は、一切の女人ごとの御不審に常に問わせ給い

そうろうおんこと

はぶ

いにしえ

によにん

ごふしん

つ

もう

候御事にて侍り。また古も女人の御不審に付いて申し

ひと

おお

そうら

いちだいしやうぎやう

と

たる人も多く候えども、一代聖教にさして説かれたると

無

ゆえ

しやうもんふんみやう

い

ひと

ころのなきかの故に、証文分明に出だしたる人もおわせ

ず。

にちれん

しやうぎやう

みそうらう

しゆにく

ごしん

いんじ

日蓮、ほぼ聖教を見候にも、酒肉・五辛・姪事なん

ふじやう

ふんみやう

がっぴ

指

いまし

どのように不浄を分明に月日をさして禁めたるように

がつすい 忌

きょうろん

かんが

そうろう

ざいせい とき

月水をいみたる経論をいまだ勘えず候なり。在世の時、

おほ さか

によにんあま

ぶつぼう

ぎよう

がつすい

とき

多く盛んの女人尼になり仏法を行ぜしかども、月水の時と

もう

きら

お

はか

はべ

申して嫌われたることなし。これをもつて推し量り侍るに、

がつすい

もう

ほか

きた

ふじよう

によにん

月水と申すものは外より来れる不浄にもあらず、ただ女人

癩

しようじ

たね

つ

ことわり

ながやまい

のくせ・かたわ、生死の種を継ぐべき理にや。また長病

れい

しによう

ひと

み

い

のようなるものなり。例せば、屎尿などは人の身より出ず

よ きよ

べつ

忌

無

てい

はべ

れども、能く浄くなしぬれば、別にいみもなし。これ体に侍

いんど

しな

甚

忌

由

ることか。されば、印度・尸那なんどにも、いたくいむよし

き

も聞こえず。

ただし、日本国は神国なり。この国の習いとして、仏菩薩
の垂迹、不思議に経論にあいにぬことも多く侍るに、こ
れをそむけば現に当罰あり。

委細に経論を勘え見るに、仏法の中に随方毘尼と申す

戒の法門はこれに当たれり。この戒の心は、いとう事かけ

ざることをば、少々仏教にたがうとも、その国の風俗に

違うべからざるよし、仏一つの戒を説き給えり。この由を

知らざる智者ども、「神は鬼神なれば敬うべからず」なん

ど申す強義を申して、多くの檀那を損ずることありと見え

そろう

くに みょうじん たぶん

がつすい

て候なり。もししからば、この国の明神、多分はこの月水

忌 たま しょう くに 受 ひとびと おお い たも

をいませ給えり。生をこの国にうけん人々は大いに忌み給

によにん ひび しよき くる おほ

うべきか。ただし、女人の日の所作は苦しかるべからずと覚

そろう

え候か。

もと ほけきよう しん ひとびと きよう

元より法華経を信ぜざるようなる人々が、経をいかにし

い 疎 おも 直 きよう す

ても云いうとめんと思うが、さすがに、ただちに経を捨て

い 得 み ふじよう ほけきよう とお

よとは云いえずして、身の不浄なんどにつけて法華経を遠

おも ふじよう とき ぎよう

ざからしめんと思うほどに、また、不浄の時これを行ずれ

きよう おろ 脅 つみ え

ば経を愚かにしまいらするなんどおどして、罪を得させ

そろう

候なり。

いっさいおんこころ えそろう

がつすい

おんとき

しちにち

このことをば一切御心得候いて、月水の御時は、七日ま

け あ

おんきよう

読

たま

そら

でもその気の有らんほどは御経をばよませ給わずして、暗

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

そろう

らいはい

きよう

向

に南無妙法蓮華経と唱えさせ給い候え。礼拝をも、経にむ

たま

はい

たま

ふりよ

りんじゆう

かわせ給わずして拝せさせ給うべし。また不慮に臨終なん

ちか

そろう

ぎよちよう

ふく

たま

どの近づき候わんには、魚鳥などを服せさせ給いても

そろう

読

きよう

読

なんみようほうれんげきよう

候え、よみぬべくば経をもよみ、および南無妙法蓮華経と

とな

たま

そろう

がつすい

もう

およ そろう

も唱えさせ給い候べし。また月水などは申すに及び候

わす。

なむいちじようみようてん

とな

たも

おな

また南無一乗妙典と唱えさせ給うこと、これ同じこと

はべ

てんじんぼさつ

てんだいだいしとう

とな

たま そうちら

には侍れども、天親菩薩・天台大師等の唱えさせ給い候い

なんみようほうれんげきよう

とな

たも

しがごとく、ただ南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべきか。

しさい

もう

そうちら

これ子細ありて、かくのごとくは申し候なり。あなかし

こ、あなかしこ。

ぶんえいがんねんきのえねしがつじゅうしちにち

にちれん

かおう

文永元年甲子四月十七日

日蓮

花押

だいがくさぶろうどのみうちごほう

大学三郎殿御内御報